

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月9日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520162

研究課題名（和文） 定家本源氏物語・伊勢物語の本文成立史に関する横断的研究

研究課題名（英文） Cross sectional study about the formation of the Tale of Genji and the Tales of Ise(Fujiwara Teika's edition)

研究代表者

加藤 洋介 (KATO YOUSUKE)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：00214411

研究成果の概要（和文）：定家本源氏物語を復原する上でもっとも尊重されている大島本（古代学協会蔵）が、室町期書写の伝本と共通する本文や漢字表記を持つことから、定家自筆本系統の本文から直接書写されたのではなく、室町期に流布していた本文に定家自筆本系統の本文を校合することで成立したことを検証した。これは伊勢物語伝本においても、同一系統にある伝本間では漢字表記など共通する部分を多く持つことから考案したものであり、伊勢物語伝本の側から定家本源氏物語の本文成立史を窺うという横断的検討から得た成果である。

研究成果の概要（英文）：The Oshima book(Possession of Paleological Association of Japan Inc.)is the most important calligraphy for restoring the Tale of Genji(Fujiwara Teika's edition).In this Oshima book,there are the variant reading and the Chinese character notation which are common in the book copied down into the Muromachi period. I thought that the Oshima book was not written by the Tale of Genji(Fujiwara Teika's edition). I presumed that it was corrected by the Tale of Genji(Fujiwara Teika's edition), although the Oshima book was a book which was circulating at the Muromachi period. Also in Tales of Ise, between the books of the same system, there was much common Chinese character notation and it obtained the hint to a certain thing. This is a result of an examination across boundaries. I referred to the feature of the duplicate copy of Tales of Ise, and considered the history of this formation of the Tale of Genji.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：源氏物語・伊勢物語・定家本

1. 研究開始当初の背景

(1) 源氏物語および伊勢物語に関する本文研究の状況

①各種伝本の本文異同を確認するための

基本的文献として、源氏物語には池田亀鑑『源氏物語大成』（中央公論社、1953～56年、以下『大成』と略称）、伊勢物語では池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』（大

岡山書店、1933年)・大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』(有精堂、1961年)・山田清市『伊勢物語校本と研究』(桜楓社、1977年、以下「伊勢物語の三校本」と略称)という校本がある。

②これまでの研究において、『大成』の河内本校異で3,886箇所、別本校異で5,600箇所ほどの要修正箇所があること、およびサンプリング調査ではあるが、伊勢物語の池田校本における千葉本35箇所、伝肖柏筆本108箇所、大津校本では伝為家筆本110箇所、藤房筆本184箇所、山田校本では専修大学蔵本128箇所、伝良経筆本42箇所におよぶ要修正箇所があることを確認していた。

③源氏物語および伊勢物語の本文を考える上でもっとも基本的な文献である『大成』や「伊勢物語の三校本」に、これほどの要修正箇所があることは、研究遂行上の大きな障害となる。『大成』の青表紙本(定家本)校異や「伊勢物語の三校本」所収の他伝本にも、相当数の要修正箇所があることが予想された。したがってまずは現在の研究環境に耐えうる正確な校異データの作成が必要であるとの認識にいたった。

(2) 定家本という視点

①これまでの研究において、『源氏物語』と『伊勢物語』の本文について、双方を定家本という視点から横断的に研究する視点はなかったと言ってよい。定家本の『伊勢物語』は、定家自筆本は現存しないものの、建仁二年本・根源本・承久三年本・武田本・天福本といった複数回におよぶ定家の書写があったことが知られる。すなわち30年以上にもわたる定家の本文校勘の過程を時系列に沿って追跡することができる。一方の『源氏物語』では、一部の巻に定家自筆本が現存するものの、奥書類がないため定家本とされる諸伝本が定家自筆本とどのような前後関係にあるのか不明である。

②そこで、本文や音便・表記の変化を時系列上で捉えることが可能な『伊勢物語』を基盤に据え、それをもって定家本源氏物語の側への検証へ向かうことが可能なのではないかと発想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、定家本源氏物語および伊勢物語の本文成立史について横断的に研究し、その具体的様相を明らかにすることにある。藤原定家が晩年古典文学の本文校勘に力を注いでいたことはよく知られているが、源氏物語と伊勢物語に相関するところを明らかにし、両作品の定家本について横断的に検証する視点は、これまでなかったと言ってよい。特に定家本伊勢物語においては、底本の変化・不変化や異文発生の状況を時系列上で把握することが可能である。そしてこの伊勢

物語の側の成果をもって、源氏物語において定家本が展開してゆく具体的様相を明らかにするという可能性が開かれてくる。本研究においては、特に定家本伊勢物語の側から知られるところを、定家本源氏物語の本文成立史解明のために資することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 定家本伊勢物語から定家本源氏物語へ
本研究では、池田亀鑑『源氏物語大成』の青表紙本校異および池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』・大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』・山田清市『伊勢物語校本と研究』という「伊勢物語の三校本」の補訂および増補作業を基盤とする。その作業の過程において、本文変化の様相や音便・表記といった点について、定家本伊勢物語における本文変化を時系列上で捉え、もってそれを定家本源氏物語の側への検証へと資することを目的とする。したがってまずは、それぞれの伝本の収集とその調査が研究実施計画の柱となる。

(2) 定家本源氏物語

源氏物語の場合、多くの有力古写本がすでに複製本という形で公刊されており、これによって調査研究が可能となるものが、調査が必要な伝本の約半分を占める。複製本未公刊の伝本については各所蔵先で撮影されたマイクロフィルム等からの紙焼写真を入手することになる。複製本が公刊されている『大成』所収伝本(三条西家本・陽明文庫本・御物本など)について調査作業を実施し、複製本が公刊されていない伝本(天理図書館蔵池田本・肖柏本や尊経閣文庫・静嘉堂文庫に所蔵される数帖の零本)の複写収集を行った上で、調査作業に取り組む。また調査を要する伝本のうちには個人蔵のものがあり、これについては所蔵者の許可を得た上でデジタル撮影を行ない、調査研究に使用できるようにする。源氏物語に関しては以上のような研究計画・方法をもって調査研究にあたる。またこの作業の過程で、定家本源氏物語の室町期写本について、大島本(古代学協会蔵)との関係、河内本・別本との関係、奥入付載本との関係、鎌倉期写本との関係など、あらゆる方面からの位置づけに関する研究を行う。実際の本文比較の作業は、常にこれらのことを意識しつつ行ない、絶えず問題の発掘に努める。

(3) 定家本伊勢物語

一方の伊勢物語については、国文学研究資料館のマイクロフィルムによって紙焼写真を収集できるものに加え、所蔵先各所へ直接出向かねば調査収集ができない伝本の調査にあたる。伊勢物語伝本の特殊事情として、大量のコレクションをもつ伊勢物語文華館鉄心斎文庫(小田原市)蔵本の調査収集が欠

かせない。また池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』所収伝本を多く所蔵する東海大学桃園文庫についても、現地での直接閲覧しか調査の方法がなく、これも年数回の調査を実施する。

4. 研究成果

(1) 大島本源氏物語への疑義

定家本源氏物語の伝本として現在最も尊重されている大島本について、その用字や改行といった細微な異同に注目するところから、大島本が定家自筆本系統の本から直接書写されたものではなく、肖柏本・書陵部三条西家本・大正大学本といった室町期書写の伝本に、定家自筆本系統の本文を校合することで成立したのではないかとの見解を論文化して発表した。定家本源氏物語においては定家自筆あるいは臨模とされる本はわずか11の巻しかなく、これ以外については大島本に拠っているのが現状である。しかしながら大島本が定家自筆本系統の本から直接書写されたものでないとする、これまで大島本の本文で是とされてきたものが、実はそのうちの多くに室町期書写本の本文が紛れ込んでいるということになり、大島本ひいては定家本源氏物語に関する今後の研究にも寄与するものと思われる。これは定家本伊勢物語において用字や改行が伝本間で継承されていることに着想を得たものであり、本研究が目的とする源氏物語と伊勢物語との横断的研究による成果である。

(2) 室町期の伊勢物語書写

室町期の書写にかかる伊勢物語は数多く現存しており、そのなかでも特異な本文を有する伝肖柏筆本・伝心敬筆本・坊所鍋島家本の三伝本について、同一系統の伝本間における用字の共通性と異同状況を確認した。(1)における大島本と室町期書写本の用字の類似は、伊勢物語においても窺うことが可能であることを示したものである。

同一の書写奥書を有する、あるいは同一筆者による複数の伝本が備わるなど、室町期の伊勢物語書写の様相を具体的に明らかにする材料は豊富にあり、それらを検討することによって、室町期書写の伊勢物語はもちろんのこと、相互の関係を辿ることが難しくなる鎌倉期書写の伝本や、あるいは源氏物語のように室町期書写本であっても伝本間を結びつける材料に乏しいものについても、新たな検討の可能性を示した。

(3) 定家本源氏物語について

南北朝期に成立した『仙源抄』に引用されている定家本源氏物語が、今日からみても非常に素姓のよい本文を有していたと推測されることを述べ、断片的に引用されるに過ぎないものの、『仙源抄』所引の定家本源氏物語には、非常に資料的価値が高いことを論文

化して発表した。

(4) 新出資料の紹介

学会未紹介の新出資料である角屋保存会蔵源氏物語末摘花巻についての調査結果をまとめた。鎌倉時代後期の書写にかかる角屋本は、『大成』所収の陽明文庫本と同系統の本文をもつものの、一方で多くの異文を有しており、そこから鎌倉時代あるいは平安時代に溯る物語書写の具体的様相を窺い知ることができる貴重な資料であることを明らかにした。

(5) 飯島本源氏物語について

近年全貌が紹介された飯島本源氏物語のうち、藤袴巻には藤原定家による『奥入』が付載されており、その本文の具体的検討から、大島本にもっとも近い本文を有する伝本であることを明らかにした。また(1)で扱った大島本が室町期書写本を土台とした本ではないかとの想定にも、飯島本がそれを裏付ける役割を果たしうることを示した。

(6) 『校本 伊勢物語』(仮称) へ向けて

本研究期間において、池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』・大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』・山田清市『伊勢物語校本と研究』という「伊勢物語の三校本」について、その所収伝本の収集および再調査を進め、ほぼ9割にあたる伝本の調査を終えることができた。しかしながらこれらを取りまとめた『校本 伊勢物語』(仮称)を刊行するためには、なおデータの再チェックに相当の時間を要し、また校本未収の室町期書写本の校異データを追加する必要性を痛感した。よって本研究の研究計画最終年度前年度の応募を行い、科学研究費補助金基盤研究

(B)「定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開に関する総合的研究」(課題番号 23320052、2011～15年度)が採択された。これにより、調査が必要な伝本についての収集作業、およびデータの再チェック作業を講じた上で、この研究期間において『校本 伊勢物語』の刊行を実現することを目指し、合わせて『定家本源氏物語校異集成』(仮称)刊行への目途を定かにすることを今後の課題とした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 加藤洋介、奥入付載の定家本源氏物語－飯島本藤袴巻の場合－、詞林、査読無、48号、(2010)、34－47
- ② 加藤洋介、室町期『伊勢物語』書写の一樣相－伝肖柏筆本・伝心敬筆本・坊所鍋島家本の三伝本をめぐって－、『伊勢物語享受の展開』(山本登朗編 竹林舎)、査読無、(2010)、8－30

- ③ 加藤洋介、大島本源氏物語の本文成立事情－若菜下巻の場合－、『大島本源氏物語の再検討』(中古文学会関西西部会編 和泉書院)、査読有、(2009)、167－208
 - ④ 加藤洋介、仙源抄の定家本源氏物語、『皇統迭立と文学形成』(大阪大学古代中世文学研究会編 和泉書院)、査読無、(2009)、305－320
 - ⑤ 加藤洋介、角屋保存会蔵 源氏物語末摘花巻－解題と影印・翻刻－、角屋研究、査読無、18号、(2009)、15－60
- 〔学会発表〕(計4件)
- ① 加藤洋介、奥入付載の定家本源氏物語(二)－飯島本藤袴巻を中心に－、中古文学会関西西部会 第二十六回例会、大阪大谷大学、2010. 9. 11.
 - ② 加藤洋介、定家本源氏物語研究の可能性、名古屋大学国語国文学会 春季大会シンポジウム、名古屋大学、2010. 7. 10
 - ③ 加藤洋介、藤原定家の土左日記書写－尊経閣文庫蔵本をめぐって－、中古文学会秋季大会、関西大学、2009. 10. 4.
 - ④ 加藤洋介、大島本源氏物語の本文成立事情－若菜下巻の場合－、中古文学会関西西部会第十九回例会 源氏物語千年紀記念シンポジウム、京都文化博物館、2008. 6. 7

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 洋介 (KATO YOUSUKE)
 大阪大学・文学研究科・教授
 研究者番号：00214411

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし